

## 書評

徳田剛著

『よそ者／ストレンジャーの社会学』

(見洋書房、2020年)

阪本 俊生

### 1. 本書について

よそ者やストレンジャーという概念の社会的な重要性については、おそらくいうまでもないだろう。社会学者は、社会について論じたり説明したりする際、しばしばこの概念を念頭に置き、また用いてもきた。とりわけ、今日のように都市化やグローバル化が進み、見知らぬ人びととの関わりが日常化した社会を考える際は、これらの概念をつねに意識せざるを得ない。ところが、これらについて、本当はどれほどわかっているのかとあらためて問われると、まったく自信がないことに気づく。

よそ者とストレンジャーは同じなのか。違うとすればどう違うのか。日本語と英語でニュアンスや意味内容の違いはいかなるものか。あるいは、民俗学で用いられる異人という用語とこれらに共通性はあるのか。本書の目的は、徳田剛氏によれば、「よそ者」あるいは「ストレンジャー」という概念について、その概念的展開を追いつつ、その意味内容を明らかにしていくことにある。本書は、心に引っかかりつつも、曖昧なままにできた、よそ者／ストレンジャーという概念の奥深さや複雑さをあらためてわからせてくれた。

### 2. 本書の構成

本書の目的の1つは、「ストレンジャー概念の意味内容が総体的に見てどのようなものと考えられるかを明らかにすること」にある、と徳田氏はいう。そして、このことを通じて、次の3つの点を明らかにしたいとしている。すなわち、1) 社会学者によって論じられた、ジンメル以降のよそ者／ストレンジャーに関する議論の展開を追いつつ、その意義と射程を明らかにすること（概念的研究）、2) 欧米の社会学分野で用いられてきた stranger とはいったい何者であるかを明らかにし、先述のような「訳語の選択についての問題」に一

定の見通しを付けること、3) これらの作業を通じてよそ者／ストレンジャーといった用語を、学術的な分析と現場の実践の両方に際してもう少し明晰で使い勝手のよい言葉へと鍛え上げることである。

もちろんこれら概念論は、本書の大きな目的の1つであり、これ自体きわめて興味深い。だが、本書の目指すところは、もちろんこれにとどまらない。その先には筆者の目論見がある。すなわち、自ら磨き上げたよそ者／ストレンジャー概念から現代社会を検討し、現代社会の核心ともいえる問題を問い直そうとするものだ。

本書は2部構成になっており、第1部となる第1章から第4章では、G・ジンメル、R・E・パーク、A・シュッツなど、おおそ20世紀前半から半ばまでの「古典期」の議論が検討され、各議論が対象とするよそ者の特性、各問題関心、論点の違いなどが明らかにされる。ここでは、「もっぱら「よそ者」的なストレンジャーに照準した」とされているように、これら初期の議論において、〈よそ者〉と stranger はほぼ重なる。

第2部（第5章から第7章）では、L・ロフランドやE・ゴフマン、Z・バウマン、J・アーリなど20世紀後半以降の諸議論を紹介しつつ、現代社会を分析する際のよそ者／ストレンジャー論の意義と射程が明らかにされる。これらの議論について、氏は「「非よそ者」的なストレンジャーをめぐる課題に焦点」を当てているという。第1部のよそ者という概念には、「空間移動を経て定住した少数者住民」という想定がある。しかし、現代では、「移動者・移住者、見知らぬ者（匿名者）、社会的マイノリティ（非空間的な要因による少数者）などの、多数かつ多様なストレンジャーを含むような社会構成」を想定しなければならない。そのため「よそ者」的なストレンジャーではない、より複雑で、空間的にも固定されない（流動的ともいえる）ストレンジャー概念が求められるのだ。

ここからは、各章の概要を手短かに述べた後、それぞれの章の内容とつながりについて紹介しておくことにしよう。

第1章は、「社会学におけるよそ者／ストレンジャーをめぐる議論の先駆ともいえる、ジンメル

による概念規定」の考察である。ジンメルによそ者論は、よそ者／ストレンジャー論にとってきわめて重要であり、本書全体にわたって参照されている。ただ、ジンメルの分析対象は、氏の見方によれば多様なよそ者／ストレンジャー全体のうちの一部に限られている。すなわち、ジンメルが見たのは「今日訪れて明日もとどまる者」、「外部性を帯びてはいるもののあくまで集団の「メンバー」として、すなわちホスト社会の中で一定の地位と役割を占める者」であり、その意味で「近さ」と「遠さ」の中間領域に位置づけられるような「近さと遠さの総合」といった両義的でアンビヴァレントなよそ者が中心の議論となっている。そのため、ホスト社会から差別され、排除されるよそ者は、ジンメルによそ者論の視野の外に置かれている。

とはいえ、ジンメルが示した視角はきわめて有効であることに変わりはない。とりわけ徳田氏が重視するのは、よそ者とホスト社会の関係に関してジンメルが示した距離のメタファーである。このメタファーは、あらゆるよそ者／ストレンジャーを分析する際の有効な視角となるからだ。

第2章では、ジンメルの視角が、パークにおいてどのように受容され、展開されていったかが論じられている。若くしてドイツに留学し、ジンメルの講義に触発されたパークは、ジンメルによそ者論を移民問題の分析に適用した。そして、それが彼のマージナル・マン概念をもたらすことになる。そのためパークは、ジンメルによそ者論には見られなかった「排除されるよそ者」という見方を持ち込んだ。

これはジンメルによそ者論の拡大解釈ともいえ、D・N・レヴィンからは「ジンメルのオリジナルの概念の「歪曲と誤解」だ」と批判されるが、このことは、より幅広いバリエーションをもつ概念へとよそ者論が発展するための出発点ともなっている。

この拡張によって、ジンメルにおいて、「近さ」と「遠さ」の中間領域に対象を限られていたよそ者論は、さらにその「ホスト社会との関わり方や距離のとり方のバリエーション」や移動性を視野におさめることができるようになった。パークの

マージナル・マンという人間類型は、ジンメルの社会的距離のメタファーでいえば、「限りなく「遠さ」「疎遠さ」によって特徴付けられるタイプの人間であり、ジンメルによそ者概念の射程圏の限界に近いところに位置づけられる問題領域」だと徳田氏はいう。これはジンメルが見たよそ者とは異なり、つねに差別され、排除される人びとであり、いわば「集団の中にとどまる「アウトサイダー」、「排除されるよそ者」としての移住者たち」である。

第3章では、パークのマージナル・マン概念のその後の展開およびその射程と、その限界がまとめられている。

この概念は、パークからその弟子のストーンキストに引き継がれ、そこで「マージナル・マンのパーソナリティの形成、その心理学的特徴と社会的役割、人種間・文化間コンフリクトの状況への適応パターンなど、パークにおいては十分に深められていなかった諸点についての詳細な理論的考察」がなされた。ストーンキストが着目したのは、世界各地の人種もしくは文化的ハイブリッド(混血)の人びとである。彼らはいずれも、ホスト社会において排除され、抑圧的な地位に置かれ、ネガティブな自意識や人種意識を抱きがちであり、「不安定なパーソナリティ特性を形成しやすくなる」という。

だが、パークやストーンキストの仮説は、「個人の置かれている文化・社会状況と内面的なパーソナリティ特性という二つの要因が不適切な形で結び付けられて」ているとして批判された。というのも、たとえ同じ社会状況に置かれていても、よそ者である人びとの内面的パーソナリティは、パークたちがいうように一定ではなく、より複雑な多様さが見られるからだ。

徳田氏は「マージナル・シチュエーションと心理的なマージナリティとを可能な限り明確に区別すること」による分析枠組の再構築が必要だとするH・F・デッキー＝クラークの指摘を示すとともに、パークやストーンキストの仮説に対する反証例となる、いくつもの実証研究をあげつつ、こうした指摘の妥当性を明らかにしている。

第4章では、ジンメルによそ者概念やパーク、

ストーンキリストの議論と対比しつつ、シュッツの主張の意義が示されている。シュッツは、「パークラやウッドの概念規定の変更によってアメリカに持ち込まれた「移民としてのよそ者」という問題設定を批判的に受け継ぎながら、移住したよそ者の適応に伴う内面的な変化の過程を的確に描き出すことに成功している」と徳田氏は評価する。

シュッツはよそ者が、ホスト社会との接触による危機体験を乗り越え、その文化パターンを習得することにより、新たに移り住んだ社会への適応に成功するプロセスを、一般化された形で提示している。これはパークラやストーンキリストが示したような、移民たちの不適応や不安、不安定なパーソナリティの描出とは別の角度からの分析であり、シュッツのよそ者論の意義は、そこに見いだせるのだという。

第2部では、すでにふれたように、「非よそ者」的なストレンジャー論へと移っていくが、第5章は、ロフランドやゴフマンが行った大都市の匿名的な社会空間、すなわち「見知らぬ者」に固まっている状況に関する社会学的研究の紹介である。ジンメルは、互いに「見知らぬ者」が集まる都市社会において、人びとが「相互に冷淡で無関心な（すなわち相手との距離を保つような）態度を見いだし」、その「防衛機制」としての意義を指摘していた。ゴフマンの「市民的無関心」論は、都市社会特有のこのような人間関係の原理を見いだしているのだ、と徳田氏はいう。

第6章は、このような匿名的な社会空間の背景には、「空間移動がより常態的なもの」となった、近代に始まった「人びとの集合形態」があるという。大都市に始まった「見知らぬ者」に固まる都市的生活様式は、今日、他の地域にも広がりつつある。そこからは人びとの異質性や多様性を肯定的に捉えるポストモダン思想とともに、バウマンの初期のストレンジャー観、すなわち、異質な人びとが共存・共生する社会観に通じるものだと徳田氏は見ている。

だが、やがてバウマンは1990年代後半から、そのスタンスを変えていく。バウマンのいうリキッドなモダンの世界では、ストレンジャーたち（マイノリティとして異質化され、差異化された

人びと）は共存・共生へと向かうのではなく、「周縁化・社会的排除の標的とされ、新たな社会階層構造へと再編成されていく」。

ここにジンメルにはなかった、ネガティブなニュアンスが付加され、社会秩序との関連が問われることになる。この新たな世界において、ストレンジャーたちは社会全体の秩序にとって邪魔な存在として排除され、あるいは無害化されるべきとされる現状がある。すなわち、バウマンは、その前期の「社会（秩序）のオルタナティブ・モデルを提示しようとする論述スタイルから、さまざまな新しい事象の形で表れてくる現代社会のネガティブな様相を捉えて批判していくという、文明批評に近いテイスト」へと移り変わった。このようなバウマンの功績は、「現代社会が「アンビヴァレンスとともに生きること」を宿命付けるような時代である、という現状認識をはっきりと示したこと」だと、徳田氏はいう。

続く第7章では、「アーリのモビリティ論を踏まえたストレンジャーの捉え方」が考察される。たしかに今日、多くの人びとが移動経験をもち、また日々移動する「移動社会」にあり、スマートフォンやタブレットといったモバイル機器を手にも、ますます「モバイルな生活」を送るようになりつつある。そして、アーリがいうように、こうした経験は、「これまでのものの見方や諸物の評価を一変させ」てきている。

社会科学はもともと非空間的な社会構造に関心を向けていたが、1980年代には社会と空間との関連に着目するE・ルフェーブ、D・ハーヴェイ、E・ソジャラの考察（「空間論的転回」）があった。アーリの「モビリティ・パラダイム」は、そのような空間要因との関連で、とりわけ「移動」に照準した方法論的立場である。

「モバイルな生活」は、私たちの社会生活を便利にし、またキャリア上の成功や収入増加をもたらすこともある一方、社会生活の不安定化やハイリスク化をもたらす。モバイルシステムは、ときにこれに依存する社会生活に、以前にはなかった障害と混乱を引き起こすといった脆弱性を示す。しばしば起こる通信や金融機関のネットワークシステム障害などはその例である。あるいは地域や

コミュニティなどの社会生活の不安定化をもたらすこともあり、また、物流の発達や人びとの移動の増加による、過剰消費や高炭素社会的な傾向も見られたりするだろう。

第6章で見た、階層化作用もこのシステムから生じる。アーリの議論は、バウマンが「移動する自由」が、「急速に私たちが生きる後期近代あるいはポストモダンの時代における階層化の主たる要因になっている」としていることと関連する。アーリはバウマンの議論を参照しつつ「とりわけ多元的な移動が、現代の「脱組織」社会における不平等形成の中心に位置するようになっている」という。例えば、モバイル化した豊かなライフスタイルや労働を行う人びとがいる一方で、モバイル化できない「低賃金・単純労働に従事する」ため、故郷から移動し、家族と遠く離れての生活を長期にわたり送るようになる、といった、モビリティを介しての格差や不平等の広がりや拡大である。

こうしたアーリのモビリティ論は、ギデンズの「再帰的近代化」、ベックの「リスク社会」や「個人化」、そしてバウマンのリキッド・モダニティ論に依拠しつつ、これらを移動性の観点から捉えていることは、ストレンジャー論にとって重要な意味がある、と徳田氏はいう。これは徳田氏の「肌感覚と符合する」とともに、今日の新たな情報ネットワーク状況を反映した考察にはアクチュアリティを見て取ることができ、今後、この議論を踏まえつつ、よそ者・ストレンジャーの議論を再検証することには大きな意義があると氏はいう。また、徳田氏によれば、一連のストレンジャー論にモビリティ論の問題関心を重ね合わせると、「日本語で意味するところの「よそ者」に再びフォーカスを充てることができる」という。というのも、氏によれば、「日本語の「よそ者」という言葉の含意が英語の「ストレンジャー」の意味範疇における空間移動に関わる部分（「ここではない場所からやって来た者」など）に限定して考えるのが妥当」だからだ。

終章において、徳田氏は、第7章を振り返りつつ、「ストレンジャーをめぐる一連の議論にモビリティ論の問題関心を重ね合わせることで、日本

語で意味するところの「よそ者」に再びフォーカスを充てることができる」という。またこの章では、これまで展開してきた各章を振り返りつつ、よそ者／ストレンジャー概念にから次の3つの理念型を抽出する。すなわち①異郷性（よそ者）、②匿名性（見知らぬ者）、③周縁性（社会的周縁や仮想へと排除された者としてのマイノリティ）を抽出している。

ジンメルやシュッツが論じたよそ者的ストレンジャーは①に該当し、②には、ゴフマンやロフランドが見たストレンジャー、③にはパークやストーンクイストラが研究した移民たちである。もちろん、これらは相互に独立しているわけではなく、ストレンジャーが複数の特性を合わせ持つことは十分に考えられるが、これにより徳田氏は、複雑なストレンジャー概念を緻密に分析したうえで整理し、明快に示して見せてくれている。

これら理念型に関連して、徳田氏は、日本語の古語である「あやし」という形容詞について、とても興味深い指摘を行っている。現代語からは「想像もつかないほどに広い意味内容とその汎用性の高さを持って」この語は、「日本語の単語の中ではもっとも英語のstrangerの語意や語感に近い言葉」だと氏はいう。そして、これには「「私たちにとってなじみがない、違和感がある」といった、「異質性」を帯びたものや人を指し示す言葉」であり、ネガティブな意味とともに、高貴などといったポジティブな意味でも用いられる。

そして、このような異質性の概念は、「異郷性」「匿名性」「周縁性」という3つの類型に通底する共通特性でもある。すなわち、ストレンジャー概念の基底には、この異質性の概念があり、これが「異郷性」「匿名性」「周縁性」といったサブカテゴリーの特性として読み込まれるとき、「よそ者」「見知らぬ者」「マイノリティ」といった見方が生じてくるという、よそ者／ストレンジャー概念の構図を明らかにする。

このようによそ者／ストレンジャーの概念史および、概念内容をまとめたうえで、徳田氏は、ストレンジャー研究に残された課題として、次の3つをあげている。すなわち、1. 現代のストレンジャーをめぐる「社会的排除・階層化」のメカニ

ズムの解明、2. 「ストレンジャーのニーズ」への対応はいかにして可能か、3. 「移動社会」の視点からのよそ者論の再構築である。

### 3. 本書を読んで

以上が概要であるが、本書は当初の目的にも掲げられているとおり、よそ者／ストレンジャー概念をその社会学史的な展開とともに精緻にまとめている。社会学を研究しつつも、この概念を深く探求できてこなかった評者にとって、知りたかったこと、また知らなかったことを、とてもわかりやすく、懇切丁寧に整理されている。

また本書は、ジンメルからパーク、ストーンキリスト、シュッツ、バウマンなどを経てアーリに至る、よそ者／ストレンジャーの社会学の系譜を、大きな流れとしてわかりやすく伝えつつも、これら主要な研究者と関連する、実に多様な他の研究者の諸研究を紹介しながら明快に論じておられる。諸研究者のそれぞれ異なる問題意識や関心、アプローチの仕方、研究対象となるよそ者／ストレンジャーたちの特性、彼らとホスト社会との関係のあり方、それぞれの議論の意義や問題点、それらへの批判等を、実にコンパクトにわかりやすい形で整理されている。

この概念の、現代社会への適応という観点だが、徳田氏はジンメルが最初に指摘した「近さと遠さ」といった、距離の視角を重視されている。このメタファーは、パークやストーンキリストからアーリに至る全体を貫いており、例えば、ジンメルにおいては「近さと遠さの総合」といった、いわば「近さ」と「遠さ」の中間領域に位置づけられるような者に、よそ者概念の対象が限定されている。一方、パークやストーンキリストにおいては、ホスト社会から排除されるよそ者という、いわば距離がもっとも遠ざけられたよそ者（関わりはないわけではないが、社会の周縁部へと追いやられているよそ者）に焦点が当てられている。そして、バウマンやアーリでは、この距離が絶えず流動的となっており、近さと遠さの移り変わりの中で、例えば階層化や排除もあれば、流動する人間関係特有の社会のあり方も展開するようなイメージという印象だ。

現代社会におけるよそ者／ストレンジャー論の展開は、徳田氏も述べておられように今後の課題とされているようだ。とりわけ、徳田氏が課題の1つ（「移動社会」の視点からのよそ者論の再構築）にあげておられるように、第7章におけるアーリの移動社会のパラダイムと、よそ者／ストレンジャー概念との関連、あるいはバウマンのリキッド・モダニティ論とアーリの議論との関連があまりはっきりとしない印象をうけた。また、これとは別に、第5章のロフランドやゴフマンに関する考察にも物足りなさを感じる。彼らは単に都市社会における、関わりからの防衛機制だけを見ていたわけではない。とくにゴフマンは、社会関係が流動化しつつある都市社会において、社会あるいは社会的な関わりは、いかに可能かを、もう少し積極的に捉えようとしていると評者は考える。上記の氏の課題を考察する手がかりは、このあたりにもあるのではないかと評者には思えた。とはいえ、よそ者／ストレンジャー概念に関する整理は見事であり、この研究が今後、どのように展開されるのか、楽しみなどである。